

顏真卿撰書「八閔齋會報德記」について

——伝世石刻の享受の一例——

宮崎 洋一

はじめに

「八閔齋會報德記」は、大暦七年（七七二年）、顏真卿が六四歳の時に撰書したもので、田神功の病氣平癒を祈願して行われた八閔齋会について記し、八角の石幢に刻され、当時の宋州、現在の河南省商丘市に建てられたものである。顏真卿の本来の姿を伝えてい^{*1}とされる楷書の中では、前年に書かれた「大唐中興頌」について二番目に大きな文字であるが、「大唐中興頌」とは異な^{*}って、この石幢について記した宋元時代の著録がほとんど無い。

本稿では、筆者が実見した現在の石幢の状態や、『顏魯公文集』所収の本文との関係を整理するとともに、「大唐中興頌」とは異な^{*}って、この石幢について記した宋元時代の著録がほとんど無いのに対して、明代以降の著録が急増してゆくことを確認し、この作品の明代以降の評価の向上について考えてみたい。

一、伝世の過程など

「八閔齋會報德記」について記す最初の史料は、大中五（八五二）年正月一日に書かれた唐の崔倬の「叙顏魯公石幢事^{*2}」である。そこには次のようにある。

會昌中、有詔大除佛寺。……此州開元寺、先有太師魯郡顏公、以郡守僚吏州人等、爲連帥田氏八關齋會、鐫紀大幢、立石表丈、而圍幾再尋。程材巨異、八觚如砥、偉詞逸翰、龍躍鸞翔。時刺史邑宰、以其大不可拆、遂鑿鑿缺敗以仆之。蓋三面僅存、委埋于土。倬大中已歲守郡、明年嘗暇日訪求前賢事蹟。郡從事涂君因言有魯公石幢、索而得之壹壤之下。瘢痍壞失、文義乖絕、尋繹研究、不可復知。意其邑居之中、必有藏錄其文者、果於前刺史唐氏之家得其模石、本末完備、炳然輝耀溢目。倬自幼學慕習魯公書法、纔不能窺涉其門宇。然惜其高蹤埋沒、遂命政治其傷殘、補續其次。

會昌年間（八四一—六年）、仏寺を除くよう詔があった。

……。この州の開元寺には、太師である魯郡の顔氏（真卿）が、郡の長官・役人・州の人々と、長官の田氏（神功）のために八閩齋会をおこない、そのことを大きな石幢に刻み、その石は高さは一丈（唐代は三・一メートル）、周囲は数尋（一尋は両手を広げた広さ）になるものがあつた。石の見栄えはとても大きく、八角の形は砥石のように平ら、立派な文章、すばらしい書法だつた。その時の刺史や邑宰たちは、「八閩齋会報徳記」が大きくて壊すことが出来なかつたので、遂に鑿や鑿でけずつてたおした。およそ三面は残っていたが、土に埋められた。わたくし倬は大中己巳（三年、八四九年）の歳に宋州の守となり、明年、暇日に前賢の事蹟をたずねた。従事の涂君が魯公（顔真卿）の石幢のことを言うので、探し求めると土の下から得ることが出来た。きずだらけでこわれており、文の意味も通じず、たずねしらべたが、知ることはできなかった。州の中に必ずやその文を蔵している者がいると思つてみると、果して前の刺史の唐氏（弘実）^{*3}の家でその模石を得た。本末は完備し、明るく輝いて目に溢れるようだった。わたくし倬は十歳から魯公の書法を慕い習つたが、なかなかその境地に入ることは出来なかつた。しかし、そのすばらしい事蹟が消えてしまうのを惜しみ、遂に命じてその壊れたところを直して、つながる

ようにさせた。

この史料から、建てられた当初の「八閩齋会報徳記」は、巨大な八角の石幢に刻まれていたこと、会昌の廢仏の際に壊されたこと、石幢の三面のみが残つていて埋められたこと、八五〇年に崔倬が掘り出したがこわれて文意も通じなかつたこと、唐弘実の模石を得て壊れたところを直したこと、唐の崔倬が十歳から顔真卿の書を習つていたこと、等が書かれている。

当初の石幢八面のうち三面しか残つておらず文意も通らなかつたのなら、当初の石幢はそのままでは使えず、別に石に再刻されたものが、現存の石幢であり、現存する拓本もその再刻からのものである可能性^{*5}がある。

前述のように、「八閩齋会報徳記」の宋元時代の状況はよくわからないが、明代以降は史料も増えてゆく。陳帥「二〇一三」にその概要が書かれ、黄河の氾濫の影響や、保存のための移転などについても指摘されている。特に洪水の影響については、楊士奇「八閩齋碑」にも、

永樂丁酉秋、進士尹崇高奉使河南、爲余致此本。而每行下缺四字、蓋打碑時爲夏潦所淹也。

永樂丁酉（十五年、一四一七年）の秋、進士尹崇高が河南に使したときに、わたしのためにこの碑の拓本をくれた。毎行の下四字が欠けており、おそらく拓本を取るときに夏の大水でおおわれていたのだろう。

とある。

近代以降、この「八閩齋会報徳記」を実見し、重要な記録を残したのは、常盤大定（一八七〇―一九四五年）である。常盤は、大正十（一九二一）年十一月二十三日に帰徳府（河南省商丘市）に行き、翌二十四日に「八閩齋会報徳記」を実見している。その常盤大定「一九二三」には次のようにある。

廿四日、晴、城内を過ぎ、南門外の開元寺址顔筆八閩齋報徳記碑を拓して、夜に及ぶ。（二五頁。「行曆日誌」）

次で南門外に至つて、八閩齋碑を探った。これは古の開元寺址に、碑亭の中に鄭重に保存せられて居る。これで碑が知らるゝと同時に、開元寺の運命をも知る事が出来た。碑は八角の大石幢で、實に見事なものである（第三圖）。顔眞卿の如き武將に八閩齋報徳記碑のあるのが珍しいから、之を拓して終日を送り、日暮れて後、城門の通過が出来ぬので、小舟に棹さしめて北門外の寓に還つた。（五一頁「續古賢の跡へ 十五、歸徳府の顔筆八閩齋碑」）

僅に、一小亭中に、唐の顔眞卿筆の八閩齋報徳記を刻せる大六角石幢を収めてあるので、開元寺がこゝに在つたといふを知らしむるに過ぎぬ。石幢の上には圓石を冠するのみ、他には何の裝飾も無い。傍の壁碑を見

れば、一旦地中に埋没せるものを、明代に發掘してこゝに安置しむるものである。（二三八頁。「支那佛教史蹟 河南歸徳府の二日」）

「八閩齋会報徳記」が開元寺址の碑亭に残っており、円石を冠しただけで裝飾のない石幢であること、などがわかる。この時採つたものと思われる拓本四枚が、帰朝翌年の一九二二年四月九日に東京帝国大学で行われた常盤の「支那仏教史蹟の調査報告」の際に展観された（二七九頁。「調査報告 展覽拓本目錄」）。

図Aは、前掲の史料の中で「第三図」として掲載されたものと同一写真で、^{*6}「八閩齋会報徳記」の最も古い写真と思われる。第五―七面の上部が写るだけではあるが、以前の姿を知ることが出来る貴重な写真である。

現存する拓本や記録を総合すると、常盤の見た「八閩齋会報徳記」は、青石質八稜柱形、各面は、高さ二七〇センチメートル、幅五〇センチメートル、^{*7}文字は各面五行、每行二八字、一字はおよそ一〇センチメートルほど、だったと思われる。

この「八閩齋会報徳記」は文化大革命中に破壊され、一九八八年に河南省石刻芸術館によつて複製が作られた。^{*8}筆者実見した複製は、上部は円石ではなく、一般の石幢に多い蓋がかけられており、前述の常盤の指摘や写真を含めた破壊される前の石幢の様子が広まっていなかったことを想

像させる。

現在、もとの石幢は、上部と下部の二つに断たれ、それぞれの一部しか残っていない。この現状については、すでに横田恭三「二〇一〇」に、上部片の第七面から第八面から見た全体・下部片の第一面から第三面から見た全体・第一面第四行上部の碑面・模刻の碑亭などが、また陳師「二〇一三」に下部片の第二面から第三面かけての全体と複製の第一面の全体が図版で掲載されている。筆者が覆われているケースの外から計測したところでは、上部片の高さは、最も大きく残っている第八面から第一面にかけてが約一一五センチメートル、下部片の高さは、最も大きく残っている第三面が約一八六センチメートル、最も小さくなっている第八面が約一一センチメートルであった。残っている文字は、次節で取り上げる拓本や前掲の常盤の写真の文字と大差ないものもあったが、次節の整理でも明らかなどおり、すでに第五面と第六面は文字が全く残っておらず、その他の面もかなりの文字が失われていた。

二、碑文の状況

「八閩齋会報徳記」の本文の史料は、下記の通りである。
(1) 石幢

前節で取り上げた通り、現存の石幢はすでに壊れていて

多くの文字を確認することは出来ない。

(2) 拓本

〔整装拓〕

各面の形そのままの拓本で、影印などで比較的簡単に利用できるものには、以下のものが知られている。この整装拓によって、もとの石幢の文字の配置などを確認できる。

1. 所蔵先不明

八面すべて下部まで揃っており、下記の二書に影印されている。

藤原楚水『図解書道史』第三卷、省心書房、一九七二年、六三六―七頁。

中田勇次郎編集『顔真卿書蹟集成』〔碑二〕東京美術、一九八五年、一二四―五頁。

2. 中国国家博物館蔵拓

八面すべて揃っているが、いずれも下部が四字ほど欠けているため、拓本の大きさは、縦二二七センチメートル、横四九センチメートルである。下記の二書に影印があるが、前者は第一面から第四面までしか影印されていない。

中国書法編集組編『中国書法 顔真卿』第二冊、文物出版社、一九八一年、一六五―六頁。

劉子瑞主編『顔真卿書法全集』第三卷、天津人美術出版社、二〇〇九年、七六二―三頁。

また、中国国家図書館のホームページでも公開されてお

り、ここでは、この整装拓が清の嘉慶道光年間（一七九六～一八五〇年）の拓本であることが記されている。

<http://mylib.nlc.cn/web/guest/search/beitejinghua/medaDataDisplay?metaData.id=621791&metaData.Id=626272&IdLib=40283415347ed8bd013483503a050012>

3. 京都大学人文科学研究所蔵拓

第一～三面と第六～八面が同研究所のデータベース「京都大学人文科学研究所蔵石刻拓本資料」で公開されている。

http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/imgsrv/takuhon/type_a/html/tou1380a.html

http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/imgsrv/takuhon/type_a/html/tou1380b.html

〔剪装拓〕

切りそろえて折り本などに仕立てられた拓本で古いものの影印には以下のものがある。

4. 故宮博物院蔵拓

現在のところ、最も字数が多く残っている拓本と思われる。

中国書法編集組編『中国書法顔真卿』第二冊、文物出版社、一九八一年。

劉子瑞主編『顔真卿書法全集』第三卷、天津人民美術出版社、二〇〇九年。

5. 上海博物館蔵拓

残っている字数は4に及ばないが、こちらも状態の良い拓本である。また崔倬「叙顔魯公石幢事」は切りそろえられていない拓が影印されている。

『唐顔真卿書八閩齋會報德記』文物出版社、一九八〇年。

中田勇次郎編集『顔真卿書蹟集成』〔碑二〕、一九八五年（ただ一部は縮小されており、また崔倬「叙顔魯公石幢事」は影印されていない）。

（3）版本

『顔魯公文集』をはじめ複数存在する。^{*9}

〔表一〕「八關齋會報德記」校勘表は、現存する石幢に残る文字、拓本に残る文字、版本の関係を各面ごとに整理し、特に現存の石幢に残る文字を示した表である。ゴシックが現存する石幢に残る文字、明朝が上記五種の拓本に残る文字、明朝は『顔魯公文集』などでわかる文字を示している（石幢と拓本の文字については、一部が欠けてそれだけでは文字が確定できないものは、残っている文字には含めなかった）。本文については、行数・字数を石幢に合わせたが、第八面の篆額・題記・崔倬「叙顔魯公石幢事」は縦三段に刻されており、紙面の関係で横に並べた。また、末尾の「故宮拓頁」は4の影印の掲載頁で、前半が『中国書法顔真卿』第二冊の頁数、○内が『顔真卿書法全集』第三巻の頁

数であり、「上海拓頁」は5の影印の掲載頁で、前半が『唐顏真卿書八閩齋會報德記』の図版に仮につけた通し番号、後半が『顏真卿書蹟集成』「碑二」の頁数である。

現存の石幢のように、各面五行、毎行二十八字だとすると、『顏魯公文集』などを用いても、各行の字数がきちんと揃わないことは明らかで、唐代の崔倬による再刻の際に、すでに文章が不完全であった可能性を裏付ける。また各面の下部に拓本が残らない部分が集中していることは、前節で言及した大水などの影響が早くからあったのではないかと思われる。図Bは、同じ第四面について、筆者が5の拓本によって作成した碑面と1の拓本と前述の複製の写真とを並べたものである。5の拓本によっても下部の文章が復元できないことが改めて確認できる。

三、評価の変遷

後掲の〔表2〕「八閩齋會報德記」主要関連著録は、「八閩齋會報德記」に関する著録を、前近代のものは撰者の生卒に従って、近代以降のものは出版年に従って整理したものである（△をつけた史料は他書の引用史料のみで書かれている史料であることを示す）。

「八閩齋會報德記」については、この表からも、宋元時代にほとんど言及されることがないことがわかる。これに對

して、明代以降は言及が増えてゆく。その中で、明の盛時泰「唐顏魯公正書八閩齋會記」には、

余嘗評此書、在顏碑者最奇偉。蓋以其氣象森嚴、而又
不窘束故尔。

わたしは以前にこの書を、顏碑の中で最も奇偉と評したことがある。それはその氣象がおごそかで厳しく、しかも堅苦しいところがないからである。

とあり、また王世貞「八閩齋功德記」は、

方整遒勁中、別具姿態。眞蠶頭鼠尾、得意時筆也。

眞四角で力強い中にも、別に姿態が備わっている。またことに「蠶頭鼠尾」、意を得た時の筆である。

とあって、いずれも顏真卿の書として高い評価を与えている。

拙稿「顏魯公祠一覽稿」^{*12}において、筆者は、主に宋代以降に各地に創建された顏真卿を廟神として祀る顏魯公祠を整理して、顏魯公祠が建てられる地域が、顏真卿の作品が多く残っていた地域とは一致しないことを指摘し、あわせて「八閩齋會報德記」のある河南省商丘市については、明代中期の一五五〇年に、府城の拱陽門の外、二里ほどの隆興寺に、王楠が顏魯公祠を創建し、清代中期まであったことを指摘した。拙稿での整理でも利用した喬世寧「顏魯公祠碑記」^{*13}には、商丘市にもともと顏真卿を祀る祠はなかったが、「八閩齋會報德記」の石幢が残っており、この由来を

詳しく記した後に、顔真卿を祀る顔魯公祠の創建を発案した監察御史の王楠の次のような言葉を引用する。

八關者、乃佛氏戒規也。而飯僧懺悔事不足傳、學士家何以稱焉。彼獨重魯公書也。嗟呼、魯公以風節高世。乃後世徒以其有六書之遺意。正所謂掇華棄實者也。

八關というものは、仏教の戒規である。しかも僧侶の懺悔の事は伝えるに足りないし、学士の家がどうして称えたりするであろうか。それはひとえに魯公の書を重んじているのである。ああ、魯公はその態度と心構えで世俗を超越していたのである。しかし、後世では、いたずらに魯公に書の奥義を伝えているという。これこそいわゆる「外観の華やかさをひろって、実質を棄てる」(『文心雕龍』「程器」というものである)。

注目すべきは、それまでの多くの顔魯公祠の場合と異なっており、顔真卿の作品があったことにちなんで顔魯公祠が創建されたことを記し、当時の人々が、顔真卿がその忠臣ぶりよりも、その書作品を重んじていることを、王楠が嘆いている点である。人々の間に、忠臣として以上に、書家としての顔真卿が広く定着していることを伺わせる。

宋元時代にほとんど言及されなかった「八閔齋会報徳記」が、明代以降しばしば言及されるようになる背景には、忠臣として以上に、書家としての顔真卿に対する評価が高つていたことが影響しており、そのことが商丘市の顔魯公祠

の創建にまで影響していたと考えられる。

おわりに

本稿では、筆者の実見に基づいて「八閔齋会報徳記」の現存の石幢に残る文字を整理すると共に、特に明代以降における「八閔齋会報徳記」の評価の高まりについて考察した。残念ながら、現存する「八閔齋会報徳記」の状態は良くないが、史料を収集することで、その評価の高まりの背景の一端を示すことが出来たと考える。

本稿では扱えなかったが、第一節で指摘した、晩唐の崔倬が十歳から顔真卿の書を習っていたことは、顔真卿の書の享受の視点から、改めて考える必要がある史料である。この点については稿を改めたい。

注

*1 飯島太千雄「試論―顔書の実像」、飯島太千雄編『顔真卿大字典』東京美術、一九八五年、一三〇―一四二三頁。

*2 以下、末尾の「表2」「八閔齋会報徳記」主要関連著録に整理した史料の引用は、前近代のものは撰者「史料名」で、近現代のものは著者(または「書名」)「出版年」で示す。また「表1」「表2」は正字体を用いる。

*3 郁賢皓『唐刺史考全編』第二冊、安徽大学出版社、二〇〇〇年、七七九頁。

* 4 中国書法編集組編『中国書法 顔真卿』第二冊(文物出版社、一九八一年)三三三頁は、第三・四・五面とするが、典拠は未詳である。

* 5 その時の刻者が「叙顔魯公石幢事」末尾の石從建と高元瞻であろう。

* 6 常盤大定・関野貞「一九四二」の五五(2)の写真(国立国会図書館ウェブサイトより)。

* 7 「中国文物地図集河南分冊」(一九九二)。高さの記載は上部の円石を含むかどうかは書かれていないが、拓本から判断した。前掲注(4)の『中国書法 顔真卿』三三一頁には、高さが三六八センチメートルとあって、これが円石を含めた高さかも知れないが、幅は八三センチメートル、毎面八行とするなど、必ずしも正確とは思えない部分がある。

* 8 「河南碑志叙録」(一九九二)。なお陳帥「二〇一三」は、破壊されたのは一九七二年で、一九九三年にもとの商丘県人民政府によって複製が作られたとする。

* 9 詳細は、拙稿「顔魯公文集」内容一覽稿」(『文教国文学』第四六号、広島文教女子大学国文学会、二〇〇二年、一一五(一)～一〇七(一九)頁。<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/h-bunkyo/metadata/5262>) および「『顔魯公文集』内容一覽稿」補論—安国活字本の影印によせて—(『文教・言語』第六号、広島文教女子大学人間科学部人間言語学科、二〇一一年、二二～三三頁。<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/h-bunkyo/metadata/12119>) 参照。

* 10 この篆額が第八面にあることも形式として不審な点がある

ろう。またこの書者は、題記には「篆額、宣德郎楚丘縣令田浣」と書かれているが、前掲注(4)の『中国書法 顔真卿』第二冊三三三頁や朱関田「顔真卿年譜」西泠印社、二〇〇八年、二二四頁などは、田悦(七五一～七八四年)とする。

* 11 基本的な図版などについては、拙稿「顔真卿現存作品基本図版解説等一覽稿」(『文教国文学』第五二号、広島文教女子大学国文学会、二〇〇八年、七四(一)～十六(五九)頁。<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/h-bunkyo/metadata/7863>) において整理したので省略する。

* 12 大連外国語学院日本文化研究中心編『日本文化研究』二集、大連理工大学出版社、二〇〇一年、四四一～四六五頁。

* 13 『大明一統志』卷二七「歸德府」、喬世寧「顔魯公祠碑記」、『康熙商丘県志』(一七〇五年刊)卷四「祠祀 顔魯公祠」・卷十三「芸文 宋州八閤齋会報德記」、(雍正)河南通志』卷四八「祠祀」「歸德府」、(嘉慶重修 大清一統志』卷一九四「歸德府」二「祠廟」。なお王楠は、『雍正河南通志』卷四八・卷七九では王楠とする。

(本学教授)

〔表1〕「八關齋會報德記」校勘表

（第一面）

有唐宋州官吏八關齋會報德記

金紫光祿大夫前行撫州刺史上柱國魯郡開國公顏真卿撰并書

夫德之所感淪骨髓而非深誠之所至去神明而何遠有唐大曆壬子歲

宋州八關齋會者此都人士景文武將吏朝散大夫使持節宋州諸軍事

行宋州刺史兼侍御史本州團練守捉使賜紫金魚袋徐向等奉爲

故宮拓頁

上海拓頁

（第二面）

河南節度觀察使開府儀同三司太子太師左右僕射知省事兼御史大

夫汴州刺史上柱國信都郡王田公頃疾良已之所建也公名神功冀州

南宮人稟元和之粹靈膺期運以傑出含弘厚下正直率先起孝而

德感生人竭忠而精貫白日而衆必資於寬簡安人務在於撫柔況乎

武藝絕倫英謀沈秘所向而前無強敵日新而學有緝熙故能殿天子之

（第三面）

邦鬱蒼生之望有日矣羯胡構逆公以平盧節將佐今右僕射李公忠臣

收滄德攻相州拒杏園守陳留許叔冀降而陷焉思明懼忠臣圖已令公

佐南德信隨劉從諫收江淮至宋州欲襲李銑公斬德信走從諫遂并其

衆而報焉肅宗大悅拜公鴻臚卿再襲敬釭於鄆州加中丞討劉

展于潤州斬平之遷徐州刺史明季拜淄青節度使屬侯希逸自平盧至

230 226 222 218 215
(821) (817) (813) (809) (806)

064 059 056 052 049
(149) (148) (147) (146) (145)

211 207 202 198 193
(802) (798) (793) (789) (784)

045 040 035 031 026
(144) (143) (142) (141) (140)

189 184 180 175 173
(780) (775) (771) (766) (764)

022 018 014 009 007
(139) (138) (135) (130) (128)

(第四面)

公以州讓之時宋州刺史李岑爲賊所圍副元帥李光弼請公討平之拜御史大夫加開府充兗鄆節度破法子營又討敬釭釭歸順焉史朝義聞之奔

上幸 陝公首末扈從都知六軍兵馬每食宿公皆躬自省視

上感焉方委以政事公涕泣固辭而止二季拜汴宋節度遷兵部大曆二

(第五面)

季加右僕射封母清河張氏爲趙國夫人妻信安郡王禕女爲涼國夫人太夫人慈和勤儉睦于親黨公性純孝居常不離左右閱讀書史或時疾病公輒累月不茹薰家中禮懺不絕仍造崇夏弘聖二寺以祈福祐五年兼判左僕射知省事加太子太師公德厚量深勞謙重慎功既高而心益下位弥大而體益恭故遠無不懷迺無不肅今夏四月忽嬰熱疾沈頓累旬

(第六面)

積善降祥勿藥遄喜鷹犬之翫悉皆棄捨羣帥感焉無復弋獵四履之內咸懷歡欣睢陽之人踴躍尤甚乃咨于州將曰昔我公之陷賊也至弊邑而首誅德信李岑之見圍也破其黨而克保城也是即我公再有大造于弊邑矣微我公之救恤則皆死於鋒鏑入於煎熬矣尚何能保完家室嬉戲鄉井者乎不資齋明何以報德徐君悅而從之來

(第七面)

五月八日首以俸錢卅万設八關大會飯千僧于開元伽藍將佐爭承唯

235 239 243 247 251
(826) (830) (834) (838) (842)

067 073 077 081 084
(150) (151) (152) (153) (154)

255 258 262 265 269
(846) (849) (853) (856) (860)

088 090 093 096 100
(155) (156) (157) (158)

273 278 282 286 290
(864) (869) (873) (877) (881)

104 108 113 117 121
(159) (160) (161) (162) (163)

294
(885)

125
(164)

恐居後已而州縣官吏長史苗藏實等設一千五百人爲一會鎮遏團練官健副使孫琳等設五百人爲一會耆壽百姓張列等設五千人爲一會法筵等供仄塞於郊垌讚唄香花喧填於晝夜其餘鄉村聚落來往舟車聞風而靡督自勤聳惠而忱先宵懋者又不可勝數矣非夫美政

(第八面)

淳深德風汪濊則何以感人若此其至者乎真卿叨接好仁飽承餘烈睹茲盛美益覲求蒙若不垂諸將來則記事者奚述

唐宋 州刺史徐向及官吏

奉爲汴宋節度觀察使右僕

射信都王八關齋會報德記

宣義郎行宋州錄事參軍崔淮

專知官朝議郎宋城縣令田珽

勒字官宣德郎前守汝州梁縣令王良器

篆額宣德郎楚丘縣令田浣

張希王

敘 顏魯公石幢事 宋州刺史崔倬撰

會昌中有 詔大除佛寺凡鎔塑繪刻堂閣殿宇關於佛祠者焚滅銷破

一無遺餘分遣御史覆視之州縣震畏至於碑幢銘鏤贊述之類亦皆毀

拆瘞藏之此州開元寺先有太師魯郡顏公以郡守僚吏州人等爲連師

田氏八關齋會鐫紀大幢立石表丈而圍幾再尋程材巨異八觚如砥偉詞

298 (889) 303 (894) 306 (897) 310 (901) 129 (165) 133 (166) 137 (167) 142 (169)

315 (906) 319 (910) 146 (170) 151 (172)

167 (914) 169 (914) 171 (915) 001 (126) 002 (126) 004 (126)

323 (915) 323 (915) 324 (915) 155 (176) 156 (176) 157 (176)

325 (916)

325 (916) 325 (916) 325 (916) 161 (161) 161 (161)

逸翰龍躍鸞翔時刺史邑宰以其大不可拆遂鑿鑿缺敗以仆之蓋三面僅存委埋于土倬大中己巳歲守郡明年嘗暇日訪求前賢事蹟郡從事涂君因言有魯公石幢索而得之壹壤之下癰痕壞失文義乖絕尋繹研究不可復知意其邑居之中必有藏錄其文者果於前刺史唐氏之家得其模石本完備炳然輝耀溢目倬自幼學慕習魯公書法纔不能窺涉其門宇然惜其高蹤堙沒遂命攻治其傷殘補續其次雖真贋懸越貂狗相屬且復瞻仰魯公遺文昭示於後矣大中五年正月一日敍

副使崔滌 判官涂景 推官崔麟

錄事參軍殷順孫 縣令 鐫字人石從建 高元瞻

曹州乘氏縣主簿崔師 傳打石本

〔表2〕「八關齋會報德記」主要關連著錄

〔唐〕

崔倬「敍石幢事」現存的拓本および『顏魯公文集』卷十四

〔宋〕

趙明誠（一〇八一～一二二九年）『金石錄』卷八、第一四七七～

八二

鄭樵（一一〇二～一一六〇年）『金石略』卷下

『寶刻類編』（一二二五年以後成立）卷二「顏真卿」卷五「崔倬」

留元剛（一一八七～一二六八年）『顏魯公年譜』

〔元〕

胡祇通（一二二七～一二九五年）『紫山大全集』卷十四「跋魯公

字」

328	328	328	328	327	327	326	326	326
(916)	(916)	(916)	(916)	(916)	(916)	(916)	(916)	(916)
161	161	161	161	161	161	161	161	161

〔明〕

鄒立誠（一三三七〇年舉人）「涪翁書頭陀贊跋」、卞永譽『式古堂

書畫彙考』卷十一「涪翁書頭陀贊」

楊士奇（一二三五～一四四四年）『東里續集』卷二十「八關齋

碑」

陳鑑（一四一五～一四七一年）『碑藪』「河南」

孫楨一五四七年跋文、上海博物館所藏拓（『金石評考』所收、李

光暎『觀妙齋藏金石文攷略』卷十一「宋州官吏八關齋會報德

記」

盛時泰『蒼潤軒碑跋』（一五五六年自序）「唐顏魯公正書八關齋

會記」

喬世寧（一五三八進士）「顏魯公祠碑記」（『康熙商丘県志』

（一七〇五年刊）卷十五（『雍正』河南通志）卷七九にも同文）
何良俊（？）（一五七三）『四友齋叢說』

王世貞（一五二六）（一五九〇）『弇州山人四部稿』卷二三五「八
關齋功德記」・『弇州續稿』卷一六四「王彭二顏體書」

孫鑛（一五四二）（一六三三年）『書畫跋』卷二下「八關齋功德
記」

董其昌（一五五五）（一六三六年）『容臺集』卷四「題跋」
趙嶠『石墨鐫華』卷三（一六一八年自序）「八關齋會碑」

王應麟『墨華通考』卷二「南直隸應天府」
（清）

孫承澤（一五九二）（一六七六年）『庚子銷夏記』卷六「顏真卿八
關齋會碑」

顧炎武（一六一三）（一六八二年）『金石文字記』卷四「宋州官吏
八關齋會報德記」

侯方域（一六一八）（一六五四年）『壯海堂文集』卷六「新遷顏魯
公碑記」・「重修顏魯公碑亭記」

葉奕苞『金石錄補』（二六八〇年序）卷二十「唐顏魯公事績敘」・
『金石錄補續跋』卷七「唐八關齋會記」

林侗（一六二七）（一七一四年）『來齋金石刻考略』卷中「宋州八
關齋會石幢」

宋荦（一六三四）（一七一三年）「八關齋尋顏魯公」〔『康熙』商丘
臬志〕卷十九「藝文近體詩 清」

〔『康熙』商丘臬志〕（一七〇五年刊）卷四「祠祀 顏魯公祠」・卷
十三「藝文 宋州八關齋會報德記」

△『佩文齋書畫譜』（一七〇八年成）卷二八「崔倬」・卷七四「唐

顏真卿八關齋功德記」

楊寶（一六五〇）（一七二〇年）『大瓢偶筆』卷四「論顏真卿書」
葉增高（葉廷桂一六二二年進士の孫）「開元寺拝顏魯公石」〔『康
熙』商丘臬志〕卷十九「藝文近體詩 清」

△李光暎『觀妙齋藏金石文攷略』（一七二九年刊）卷十一「中興
頌」・「宋州官吏八關齋會報德記」

黃叔瓚（一六六六）（一七四二年）『中州金石攷』卷三「歸德府商
邱臬」

△『六藝之一錄』卷八一・卷八五・卷一一・卷一二四・卷三二
九・卷三三四上・卷三四三

〔『雍正』河南通志〕（一七三五年刻）卷五一「古蹟上」歸德府
『乾隆 歸德府志』（一七五四年刊）卷三十

王昶（一七二四）（一八〇六年）『金石萃編』卷九八「八關齋會報
德記」

畢沅（一七三〇）（一七九七年）『中州金石記』卷三「唐」下
趙紹祖（一七五二）（一八三二年）『金石文鈔』卷六「唐八關齋會

記」・『古墨齋金石跋』卷五「唐宋州官吏八關齋會報德記」
孫星衍（一七五三）（一八一八年）『寰宇訪碑錄』卷四

錢泳（一七五九）（一八四四年）『唐碑題跋』「八關齋會碑」
洪頤煊（一七六五）（一八三三年）『平津讀碑記』卷七「八關齋會

報德記」

瞿中溶（一七六九）（一八四二年）『潛研堂金石文字目錄』卷三
包世臣（一七七五）（一八五五年）『藝舟雙楫』「後附四則」

王鯤『話雨樓碑帖目錄』卷三（一八三五年刊）
姚晏『中州金石文目』（一八一〇年成）卷二

『嘉慶重修』大清一統志（一八四二年成）卷一九四「歸德府」二

郭尚先（一七八五～一八三二年）『芳堅館題跋』卷二「唐八關齋會報德記」

楊鐸『中州金石目錄』（一八六七年序）卷四

楊守敬（一八三九～一九一四年）『學書邇言』「評碑」

康有爲（一八五八～一九二七年）『廣藝舟雙楫』卷一「購碑」・卷四「餘論」・卷六「榜書」

羅振玉（一八六六～一九四〇年）『唐風樓金石文字跋尾』「麻姑仙壇記大字原石本跋」

方若（一八六九～一九五四）『校碑隨筆』卷六「八關齋會報德記」

（近現代）

張宗祥「一九一八」『書學源流論』

常盤大定「一九二三」『支那佛教史蹟』金尾文淵堂。（國立國會圖書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/971066>）。

歐陽輔「一九二三序」『集古求真』卷五「眞書三」八關齋會報德記

常盤大定・關野貞「一九四一」『支那文化史蹟』第五輯、法藏館。（國立國會圖書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1902664>）。

〔中原文物〕「一九九〇」『河南碑刻敘錄 八關齋會報德記』〔中原文物〕一九九〇—二（總五二）、一〇六頁

〔中國文物地圖集河南分冊〕「一九九二」國家文物局主編『中國

文物地圖集 河南分冊』中國地圖出版社、一九九一年、三八二頁

〔河南碑志敘錄〕「一九九二」河南省文物局『河南碑志敘錄』中國古籍出版社、二〇八頁

手島一眞「二〇〇二」『八關齋會の盛行と唐代人士の信仰』、

佐々木孝憲博士古稀記念論文集刊行會編『佛教學佛教史論集 佐々木孝憲博士古稀記念論集』山喜房佛書林、一〇七～一一六頁

李東社「二〇〇五」『八關齋』『商丘日報』五月八日

橫田恭三「二〇一〇」『中國文字文化の旅 書の史跡・博物館

全域徹底ガイド』藝術新聞社、二二四頁

陳帥「二〇一三」『《八關齋會報德記》石幢考述』〔中原文物〕

二〇一三年第五期（總一七三期）、六五～六八頁

劉芳「二〇一三」『顏眞卿《宋州八關齋會報德記》碑考析』『黑

龍江史志』二〇一三一九、一四七頁

정명준（鄭炳俊）「二〇一三」『顏眞卿、〈有唐宋州官吏八關齋會報德記〉譯註』『新羅史學報』二七、三五三～三七〇頁

※△印は、既出の史料の引用のみの著録を示す。

图A



图B

